Śrīkaṇṭha の仏教批判

村 上 真 完

序

インドにおいて仏教が滅亡したと考えられている13世紀以後にも,ヴェーダーンタ派では,仏教批判が次々と試みられている.いま取りあげる Śrīkaṇṭha (Śk と略) も Brahma-Sūtra(BS) に註釈を書いて,仏教批判をしている(ad BS. 2. 2. 17~30).彼は Rāmānuja(R,1017-1137)の註釈 Vedāntasāra(Vs)に多く依存しているが,シヴァ派の立場に立っている.彼の名は Śrīpati(Śp)の Śrīkara- $Bh\bar{a}$ sya に引かれている¹⁾が,著名な Mādhava(14世紀後半)の Sarvadarśana-Samgraha(SDS)は,両名については言及していない. H. Rao に従えば,Śk は 1270の人.恐らくは13-14世紀の人であろう²⁾. Śk の簡潔な註釈に対してはシャンカラ派の大学者 Appaya Dīkṣita(Ap,16-17世紀)が詳細な復註 Śivârkama- $Nid\bar{i}$ pikā と,要旨を詩節にまとめた $Nayamanimāl\bar{a}$ を著している³⁾.この復註 及びRの Vs^4)と Śrī- $Bh\bar{a}$ sya($\hat{S}Bh$)が Śk 註の理解に役立つ.

II Śk の仏教批判 (vol. II, pp.80~100) の要旨

- 1 集合体原因説 (samudāya·kāraṇa·vāda): (1)地水火風の極微を原因とする外的集合体, (2)心・心所から成る内的集合体, その原因は五蘊. →集合体説批判: 刹那〔滅〕 論者 (kṣạṇikatva-vādin) には集合体は不可能である (pp. 80-82). →
- 2 無明と貪等が互に縁となるから集合体は可能. →無明は果を作らない, 知者には無明が滅し貪等もない. 故に集合体原因説は正しくない (p.83).
- 3 刹那滅においては、非存在(無)から〔果が〕発生することになろう.
- 4 因がなくとも果が発生するなら、増上縁等を説く仏教の主張と矛盾する. そうでないなら因果が同時となる (刹那性が破られる) (p.84).
- 5 択〔滅〕・非択滅 (pratisaṃkhyā'pratisaṃkhyā-nirodha) は得られない. 存在している実体には断絶がないから (p.85).
- 6 発生したものが空虚 (tuccha) になっても空虚なものが発生しても,過失があるから,この見解は正しくない (p.86).

- 7 虚空が空虚であることは、ありえない、なぜなら地等と異ならないから (p.86).
- 8 想起があるから刹那性は成立しない、→集合体原因説は整合的ではない(pp. 89-91)、 以上、外的対象存在論者 (bāhyârthâstitva-vādin) 批判 (ad BS. 2.2.17~24).
- 9 外的対象が自らの形象 (ākāra) を知に与えてから消滅するが,知の形象の多様性によって外的対象の多様性が推論される (経量部説).→このことはありえない.なぜなら刹那に滅して存在していない基体 (対象)の属性が [知に] 移行することは見られないから (p.92).
- 10 刹那滅説においては, 無関心な努力しない人にも成就があることに なろう (p.93, 以上 ad *BS*. 2.2.25~26).
- 11 有形象の識のみが真実であって、外的なものはない(唯識説)→「瓶を〔私が〕知る」 というように対象を知覚するのであるから、外的対象が無いのではない(pp.96-97).
- 12 覚醒時の知は夢とは性質を異にするから、夢のように虚妄ではない (p. 97).
- 13 対象のない知が存在することはない. 対象のない知は知覚されないから. 故に唯識 説はありえない (p.98, 以上 ad BS. 2.2.27~29).
- 14 一切皆空説 (sarva-śūnya-vāda) はありえない. なぜならあらゆる点で妥当でない から (pp. 99-100, ad *BS*. 2. 2. 30).

Ⅲ Śk 註と R の Vs

BS. 2.2. $18\sim30$ の註釈において、Śk 註は Vs と同文を含む(仏教批判の最初の A^{3-1} の A^{3-1}

(1) 『《択[滅] と非択滅とは得られない. [存在している実体には] 断絶がないから.》 (pratisaṃkhyā'pratisaṃkhyā-nirodhâprāptir avicchedāt, BS. 2.2.21)

(Sk 註) 滅 (nirodha) とは次に連続しない (刹那的に断絶する) 消滅 (niranvayavināśa) である。粗大な (sthūla) それ (択滅) と微細な (śūkṣma) [非択滅] とはありえない。なぜなら [瓶が割れて] 半球等になることを本質とする状態を 得る ことこそ, 消滅という語によって表示されるのであるから, 存在している実体 (dravya) には《断絶がないから》』 (p. 85¹-⁴)

択滅と非択滅と虚空の三は、仏教(説一切有部)においては、無為 (asaṃskṛta, 作られない条件づけられない永遠で不生不滅なもの)と呼ばれる. 択滅とは智慧のはたらき (pratisaṃkhyā, 択, 簡択, 揀択, いわば反省知, 洞察知)によって煩悩を滅し

ていることであって,悟り (解脱) の境地である.非択滅とは智慧のはたらき (択) によらないが,生ずべき因縁を欠くために,生じないことである.『俱舎論』 (Abhidharma-kośa-Bhāṣya, p. 4) には,例として一方の (特定の) 色に眼と識とが注がれているときには,他の色や声等は知覚されないで過ぎ去ってしまい,他の色や声等を対象とする識(知覚)はもう発生することができない,と述べている.ところが, R や Śk はそうは解釈しない. R (ŚBh. ad BS 2. 2. 21) は次のように説明している.

『刹那〔滅〕論者(kṣanikatva·vādin)によれば、①槌の打撃等の直後にあるものとして知覚できる(upalabdhi-yogya)・類似の相続の終わりを本質とする(sadrśa·samtānā-vasāna·rūpa)・粗大な〔滅〕と、②類似の相続において刹那毎にある知覚できない(upalabdhy·anarha)微細な次に連続しない(刹那的に断絶する)消滅とが、択〔滅〕と非択〔滅〕という語によって表示される。』(R.D. Karmarkar's ed., I, p. 673³-5)ここの相続が心相続ではなくて、瓶等が同じ形をもって存続していることを予想している。瓶を槌で打ちこわすと、瓶の滅が知覚できる。これが択滅である。知覚できる滅である。しかし瓶が少しずつ風化して壊れていくのは、知覚できない。これが非択滅だという。つまり知覚できない微細(微妙)な滅である。

Ap の復註もRと同様に次のように説明する.

『その〔滅〕は粗大な〔滅〕と微細な〔滅〕との二種である。槌の落下(打撃)等の直後に皆に知覚される瓶等の消滅が,粗大なる択滅と言われる。択(反省知,洞察知)とは,対象の存在に反し(viṣaya-sattva-pratikūlā)・その[対象の]非存在を捉らえる世人の意識(buddhi)であり,その[択の]対象である滅が〔択滅〕である,と〔複合語の〕部分の意味のつながりがあるから。それ(択滅)と反対(逆)の微細な滅が非択滅であり,世人の知覚できない・仏教家達によって論理をもって証明される刹那毎の消滅(pratikṣaṇa-vināśa)である。』(p. 858-12)

ここには、一々の煩悩を智慧の力によって消滅させる(択滅)という視点はない. この点は Śankara (Ś) の解釈とは異なる. Śは同経 (Ś では 2.2.22) の註釈の始めの方で

『聞くところでは、意識 (buddhi、覚、智) にもとづく諸存在の消滅が択滅というと言われる』

と説明し、次経の始めでは

『無明等の滅が択滅に含まれる,と他(仏教従)によって想定されている』 と述べている。 \acute{S} は仏教説を正確に知っている。 \acute{A} の復註はこの \acute{S} 説には顧慮せず,Rと \acute{S} k 註に従っている。 さて何故に、以上のような二種の滅がありえないのか。 R や Śk は、存在しているものが滅して無に帰する、とは考えない。 存在している実体には断絶がない、存在しているものは永久に無にはならない、という考え方(因中有果論)に立ち、刹那に消滅して断絶する消滅を承認しない。 消滅というのは、実は「存続している実体が他の状態にいたる」($Ap.\ p.\ 85^{7-8}$) にすぎないのであって、瓶が割れて破片となっても、瓶の本質である粘土は無くならない、と見るのである。 Ap は仏教家を因中無果論者($asat-k\bar{a}rya-v\bar{a}din,\ p.\ 85^{7}$) と呼んでいる。

(2)『《[外的対象は] 無いのではない.〔行為主体が対象を〕知覚するから.》(nâbhāva upalabdheh, BS. 2.2.27)

(Śk 註) ここに仏教家達の中の唯識論(kevala-vijñāna-vāda)が正しいか,否か,という疑問について,正しいというのが前主張(反対説)である。なぜなら,有形象の(sâ-kāra)識のみが真実(tattva)であり,内的なものである。外的な句義はない。夢においては外的な句義を予想せず,単なる意識(覚)によって,言行(vyavahāra,経験)が見られるからである。そのように覚醒時の言行(経験)の確立も可能である。それゆえに唯識(vijñāna-mātra)が真実である,と。このよう[な主張]になるのに対して,答えられる。「瓶を〔私が〕知る」と,行為主体が行為目的として対象を知覚するから》,それが《無い》ということはでき《ない》。なぜなら,知の形象(jñānâkāra)とは,人が特殊の対象に対する言行に適することになることにほかならないからだ。

夢の喩例によって覚醒時の言行(経験)も空である(śūnyatva)と言われたことについて,〔経作者は〕言う.

《また〔覚醒時の知は夢等とは〕性質を異にするから、夢等のように〔虚妄〕ではない。》 (vaidharmyāc ca na svapnâdivat, BS. 2.2.28)

(Śk 註) また覚醒時の知は、器官の過失による〔として〕否定されることがないことを本質として〔夢等とは〕《性質を異にするから (5ºkaraṇa-doṣa-bādha-rāhitya-rūpa-vaidharmyāc ca)、夢等のように》虚妄では《ない》. これゆえに唯識は真実ではない. 他の論理を〔経作者は〕述べる.

《〔対象のない知が〕存在することはない. [対象のない知は] 知覚されないから.》(na bhāvo 'nupalabdheh, BS. 2.2.29)

(Śk 註) 対象のない (artha-śūnya) 知が存在していること (sadbhāva) はありえ《ない》. それはどこにも《知覚されないから》. 夢の知も対象を有することがありうるだけである. それゆえに唯識説は妥当でないだけである.』 (pp. 96^1 - 98^1)

以上は唯識説批判の全文である. Śk はR (Vs) に従いながら,より明確な理解を示そうとして、簡潔ではあるが、時には独自の解釈をも加え、適切な文章を

もって結んでいる.この後に一切皆空説とその批判の節が続く.

- (3) 『《また〔一切皆空説はありえない. なぜなら〕あらゆる点で,ありえない(妥当でない)からである.》 (sarvathā-anupapatteś ca, BS. 2.2.31)
- (Śk 註) この節においては、[一切] 皆空説 (sarva-śūnya-vāda) が正しいか、否かという疑問がある。

「〔一切皆空説が〕正しい」というのが、前主張(反対説)である。なぜなら、一切世界は、存在している(sat)のではない。否定されるからである。存在していない(asat)のでもない。理解されているからである。〔存在・非存在の〕両方を本性とする(ubhayâtmaka)のでもない。矛盾するから、〔存在・非存在の〕両方を本性としない(anubhayātmaka)のでもない。ありえないから、むしろ一切は四辺(四句)を離れており(catuskoṭi-vinirmukta)、空である(śūnya)のみである。。しかし直接知覚の顕現は、世俗(俗説)に根ざしている(saṃvṛṭi-mūla)。それゆえに空説は正しいと。

このよう〔な主張〕になるのに対して、定説が説かれる。〔一切〕皆空説はありえない、何故か、「存在している」という主張におけるように、「存在していない」という主張においても、空虚であることは《ありえないから》(tucchatvânupapatteh)、存在しているという〔意識と語〕と存在していないという意識と語とが(sad-asad-buddhi-śabdau)、事実に含まれている相互に矛盾した有と無とを本質とする特殊の状態を対象とするからである。

(p. 100) しかし、「直接知覚の顕現が世俗に根ざしている」というこりも、笑い飛ばすべきである。一切が空であると、何でもこのように顕現する世俗(俗説)の依所は何であるか(何もない)。それゆえに〔一切〕皆空説はすべてに矛盾しているだけである。』 (pp. 99^2 - 100^2)

この経を一切皆空説批判と解するのは R ($\dot{S}Bh$, Vs) であり、ここでも皆空説批判の文の中に Vs と同文が認められるが、微妙な相違がある。この一切皆空説は、有・無・有無・非有非無の四句の否定を骨子とする。 R ($\dot{S}Bh$) では,「存在しているものは存在 (有) からも非存在 (無) からも発生しない」「自体からも他からも発生することはありえない」ということを論点とし,二句の否定を骨子とし,Vs でも有・無の二句をもって論じている。 $\dot{S}k$ は必ずしも R (Vs) をコピーしているのではない。

Ⅳ 結び Śk 註の仏教批判の特徴

Šk 註の仏教批判の節は、Rの Vs に従い簡潔ながらも、より明解な説明となっている。Šk は出典を引用することも殆どないが、Rの用いない資料をも用い

ている. Ap の復註は典拠となる文を引用し、詳細な議論を含み、16~17世紀において、インド思想界において、仏教思想がどれだけ、どのように知られていたか、を知る重要な資料となっている. 詳しくは他日に期したい.

- 1) C. Hayavadana Rao ed., *The Śrīkara Bhāshya*, Bangalore 1936, vol. I. Introduction, p. 36. に指摘された. vol. II (Text) p. 200⁸ (ad *BS*. 2. 1. 22, Śrīkaṇṭhaśivâradhya という), p. 320³³ (ad *BS*. 3. 2. 8, Śrīkaṇṭhaśivâcārya という) に出ている。また Śrīkarabhāṣyam of Śrīpati Paṇḍitācārya, University of Mysore 1977—1978, のテキストの vol. I. p. 400¹³, vol. I. p. 216⁸ に出ている。
- 2) 前引の H. Rao は Śp を14世紀に, Śk の年代を碑文等によって1270年または13世紀第三の四半世紀に位置づけている (pp. 42, 44, 48). Dasgupta, A History of Indian Philosophy vol. V, Delhi 1975 (1st ed. 1922), p. 11 は Rao に従い, Śk は1270年頃に生きていたとしている. Jadunath Sinha, A History of Indian Philosophy, vol. Ⅲ, Calcutta 1971, p. 155 はその外に1350年説を紹介している.

T.R. Chintamani, The Date of Śrīkantha and his Brahmamīmāṃsā JOR 1, 1927, pp. 67-76. 183-184 は13世紀中頃以降と見ている.

- 3) The Brahma Sūtra Bhāṣya of Śrīkanṭhācārya with the Commentary Śivārkamani Dīpikā by The Famous Appaya Dīkṣita ed. by Pandit R. Halasyanatha Sastri, 2 vols, (1st ed. 1908) Reprint, Delhi 1986.
- 4) Vedāntasāra of Bhagavad Rāmānuja ed. by Pandit V. Krishnamacharya with English Translation by M.B. Narasimha Ayyangar, The Adyar Library Series vol. 83, 2nd ed., Madras 1979.
- 5) 版本には kāraṇa- しかし Vs p. 181⁷ に karaṇa-doṣa-bādhaka-pratyaya-rāhitya-rūpa-vaiṣamyāc ca はとあるので、karaṇa と訂正して読む.
- 6) ここには Ap (p.99¹⁷⁻¹⁸) も指摘し引用している次の詩節を予想している. na san nâsan na sad-asat na *vâpy anubhayâtmakam/ catuṣ-koṭi-vinirmuktaṃ tattvaṃ Mādhyamikā vidur iti/

このサンスクリット原文は次の諸書に出ている。Bodhicaryâvatāra-Pañjikā, P.L. Vaidya ed., p. 174¹¹⁻¹²; Subhāṣita-Samgraha p. 15⁹⁻¹⁰; Advayavajra's Tattvaratnāvalī, 宇井伯寿『大乗仏典の研究』岩波書店,昭和38年, p. 6¹³⁻¹⁴, V.V. Gokhale ed., Madhyamaka-śālistamba-sūtra, Buddhist Sanskrit Texts No. 17 Mahāyānasūtrasamgraha I, p. 115¹³⁻¹⁴. *ただしどの版本も第二句の vâpy を câpy とする。また Ś に帰せられる Sarvasiddhānta-samgraha 3.7 もほぼ同文。この詩節は Āryadeva の Jñāna-sāra-samuccaya (D. No. 3851) 第28詩に遡る。また村上真完・磯田熙文『インド哲学と仏教との交渉』(平成6~8年度科学研究費補助金基盤研究研究成果報告書,平成 9 年)pp. 37-49参照。

〈キーワード〉 Śrīkaṇṭha, ヴェーダーンタ派,仏教批判

(東北大学名誉教授, 文博)